6666 まくひ
かわら版

発行
苫前町郷土史研究会
苫前町郷土資料館 ㉑
平成26年6月

親子三代・百十八年つづく ～農業天気日誌～

九重 森晃一さん

専門家から、学術的にも貴重な資料として評価されている、九重地区の森晃一さんの農業天気日誌。祖父から三代にわたり、いまもその日誌は生きている。

祖父の仁三郎さんは、開拓者で、昭和三十六年まで記録し、息子の仁作さんに引き継ぎ昭和三十九年に亡くなった。その後、孫の晃一さんに託され、現在も毎日天候の状況を記しており、農業経営の重要な参考資料として使われている。

（このほか、稲の種別ごとに標本として郷土資料館に展示されている。稲の成育状況、稲の出穂統計表、冷害時の穂など。昔の米づくりの苦労がしのばれる標本がある。

また稲の名が、イシカリ、雪もち、坊主五号、農林二〇号、白雪、栄光、照錦など…懐かしい稲の標本がある。一度ゆっくり資料館へ足を運んで見てください。

「苫前町の宝」を掘り出そう!! 放談会で盛りあがる

苫前町郷土史研究会の総会と放談会が五月三十日、午後五時から古代の里のアイヌのチセ（家）で会員十一人が集まって開催された。

平成二十六年度の事業計画、予算を審議したあと放談会に移り、三浦綾子記念館への協力、学社融合の「苫前町の歴史探険」「郷土資料館見学」への講師派遣、町文化賞などの調査、研究、さらに、いま町が募集している「苫前町の宝」についても歴史的な見地から提言していく。

また「陣屋の跡、水田発祥の地」など、さまざまな史跡ほか、三浦綾子や熊嵐の吉村昭の文学碑の建立、明治から大正、昭和にかけた歌人で古丹別小学校で元校長を勤めたものの、不敬罪の嫌疑で学校を追われた鳴海要吉、逆境の歌人と言われ、九重小学校でも教鞭をとった小田観蛍にも再び光を当てたいなど放談会はこれまでにないほど盛り上った。

あなたも郷土史研究会に入って苫前町の歴史を勉強してみませんか。

郷土資料館から

小樽の人 感激して目に涙…

六月七日、郷土資料館に六十歳前半の男性が来館し、昔の下町の話しをした。聞けばこの人は、小樽市から来た小松義幸さんという人で、小樽市で大和水産会社の専務で昭和二十年頃、叔父が下町で四～五年ほど植田がまぼこ店を経営していたことがあると聞き一度跡地を訪れ知っている人がいれば話も聞きたいと苫前に来たという事であったが、管理員の宮本アサヒさんは少しとまどったが折角ここまで来たのだからと郷土史研究会の鎌田節雄さんに連絡したところ何となく思い当たる節があると言って兄の信夫さん（同会員）に連絡したところ、実は鎌田さんはシベリアから復員後、植田がまぼこ店で事務を執ったとのこと。

鎌田信夫さんは早速資料館に駆けつけ当時の工場のことや下町の様子などを詳しく話したところ感極まって目に涙を浮かべ真剣に聞き入っていたという。

そのあと下町の工場跡地まで足を運びさらに鎌田さんから話を聞くと何度も何度もお礼を言って帰って行ったという。

ほかに、㈲工藤商店もかまぼこを製造していた。

町外の人にはいつもおもてなしの心を持ちたいものである。

◎トイレが改修されました。昨年、来館者から古いトイレを指摘されましたが、開館前に半水洗化され喜ばれております。

◎テレビが新しくなりました。熊嵐などビデオ放映してきたテレビが老朽化したため新品のテレビが設置されました。

浜の人

浜の人は声が大きく言葉が短い。これは魚を捕ったり、鮮度が落ちないため急ぐまた天候に左右されるのでスピード職業だ。だけど陸に上がれば心根の優しい海の男ばかりである。

山の人

山の人は言葉がていねいでおとなしい感じ。これは精魂込めて育てた田畑の作物を朝から晩まで観察、管理し、収穫まで急ぐことはない。せわしさがないのでいつもゆったりと見える。

～街並地図の活用を～

郷土史研究会が作製した昭和三十年の苫前と古丹別の街並地図を同窓会やクラス会、親戚の集りなどで活用してください。（公民館でコピー有料）